

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00730

研究課題名（和文）学習および学習支援を支える「態度」とは：概念の整理・体系化とその育成に関する研究

研究課題名（英文）What are "attitudes" that support learning and learning support: A study on systematizing the concept of attitude and its development

研究代表者

宇佐美 洋 (USAMI, Yo)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40293245

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）： 学習、または学習支援を行っていくには、知識・技能といった知的・技術的側面のほか、実際にある人がどのような行動を取るかに影響を及ぼす「態度」という心理的側面も必要となる。しかしながら一般に態度として想定される項目の中には、「精神論的心構え」を連想させるものも多く含まれてしまっており、そうした項目を直接の教育目標とすることには問題がある。本研究では態度諸項目を、「教育可能性」という観点から適切に分類し、各項目間の関係を示す概念図を作成するとともに、そうした態度諸項目の一部を具体的な教育活動の中で効果的に育成していくための方法について考察し、提案を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではまず、従来のコンピテンス論の中で扱われてきた「態度」という概念の中に、1) 人間としての生き方に関する態度、2) Performanceを可能にする諸要素の習得と活用に関する態度、が混在していることを示した上で、教育活動においてはまず2)の側面への直接的働きかけを行い、そこから学習者本人の自発性に基づき1)についての問い直しを促していくという道筋を研修のグランドデザインとして示した。さらに、2)から1)への促しが実際の教育実践の中でどのように実現されるかの実例を示した。このように本研究の意義は、「態度育成」について、理論・実践の両面についての貢献を行ったことであると言える。

研究成果の概要（英文）： Besides intellectual and technical aspects such as knowledge and skills, a psychological aspect called "attitude" that influences how a person actually behaves is required in learning and learning support. However, many of the items that are generally assumed to be attitudes are associated with "mental-effort-first principle," and it will be a problem if we set such items as our direct educational goals.

In this study, we appropriately categorized the various attitude items from the perspective of "trainability," developed a conceptual diagram that indicates the relationship among those item categories, and proposed effective methods for fostering some of the attitude items in concrete educational activities.

研究分野：日本語教育，学習論

キーワード：コンピテンス論 態度育成 教育可能性 体系化 内省 気づき

1. 研究開始当初の背景

学習、または学習支援を行っていくには、知識・スキルといった知的・技術的側面のほか、実際にある人がどのような行動を取るかに影響を及ぼす「態度」という心理的側面も必要となる。むしろ、知識・技能が備わっていたとしても、それらを適切に活用するための「態度」がなければ、真の意味で深い学習・学習支援はできないとさえ言えるのであるが、応募申請時においてこうした「態度」がどのような要素から成っているのかの考察は極めて不十分であり、「態度」として想定される項目が脈絡なく列挙されているに過ぎなかった。

本研究では、学習・学習支援を支える「態度」概念の再整理を行うとともに、どの「態度」を育成するための方法論についても考察を行うこととした。

2. 研究の目的

学習および学習支援を行うために必要となる「態度」という概念が、どのような下位概念から成り立っているか、全体としてどのような概念体系をなしているかについての理論的考察を行うとともに、そうした考察に基づきつつ、「態度育成」を目的とする有効な研修・教育実践の在り方について提案を行う。

3. 研究の方法

- 1) 近年の各種コンピテンス論において、「態度」がどのように扱われているか、また日本の戦後の学校教育において、「態度」の扱いについてどのような論争が行われてきたかについてのレビューを実施する。
- 2) 文化審議会国語分科会(2019)『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版』で挙げられた「態度」諸項目を検討・再整理することにより、「態度」諸項目が全体としてどのように分類(クラスタリング)されるか、各クラスタ同士がどのような関係にあるかを示す概念図を作成する。またこの概念図に基づき、学習・学習支援を目的とする教育活動において、「態度育成」は以下にして行われるべきかのグランドデザインを示す。
- 3) 「態度育成」を目的とする教育活動に、実際に参加した受講者に対しインタビューを行い、具体的にどのような態度変容が起こったか、どのような要因がその変容に影響を及ぼしていたかについて考察を行う。

4. 研究成果

上記1)~3)の研究方法に基づいて得られた成果について以下に述べる：

1) 「態度」概念レビュー(宇佐美2019)

文化審議会国語分科会(2018)『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改定版』では、日本語教育人材に必要な資質・能力が、日本語教育人材の活動分野・役割・段階ごとに、「知識」「技能」「態度」の3分野に分けて示され、これを研修開発の拠り所とすることが求められている。しかしながら、近年のコンピテンス論における各種議論を踏まえつつその内実を詳細に検討すると、「重要概念に定義が示されていない、各概念が何を指すのかがあいまいなまま議論が進んでいる」「世界的に進行中の各種コンピテンス論を参考にした形跡がなく、文科省内における従来の議論を無批判に受け継いでいる(かつ文科省内での議論とも一部齟齬が見られる)」などの問題がある。本論文はそうした点を明確にするとともに、この報告書に対する批判的検討に基づき、「資質・能力」について今後意義ある考察を行っていくためには、どのような点について配慮すべきかの議論を行った。

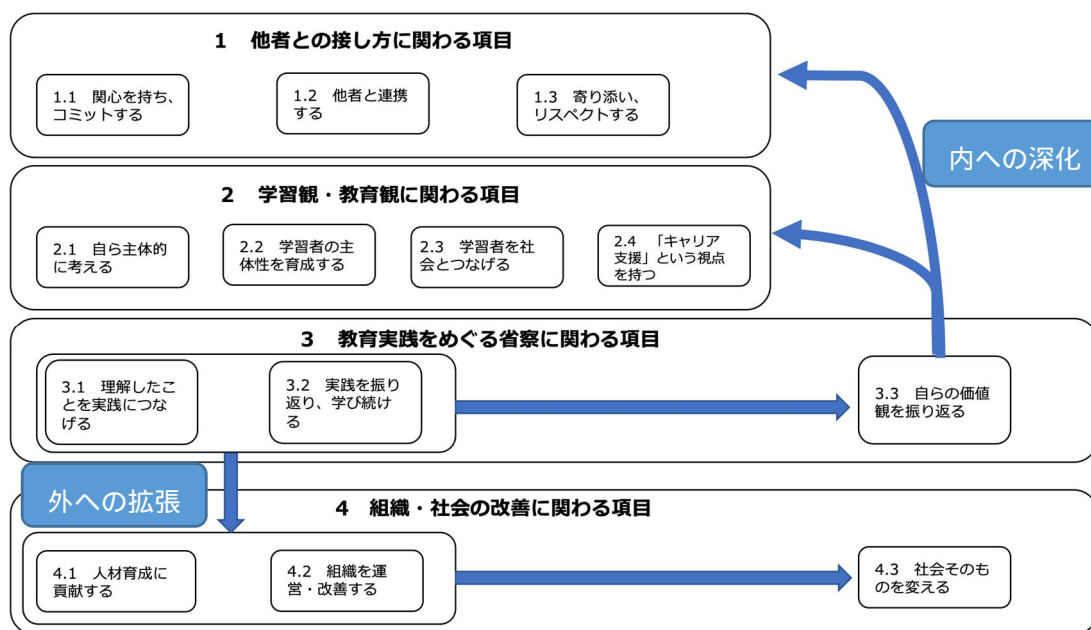
2) 「態度」概念の再整理(宇佐美2022a)

文化審議会国語分科会(2018)で示されている「態度」諸項目には様々なものを含み、中には「精神論的心構え」としか見えない項目も含まれてしまっている。そうした項目の育成や評価が可能であるかは極めて疑問に感じられる。また戦後日本の学校教育においては、こういう「態度」項目を教育目標の中に含めてよいかについて激しい論争があったのだが、この枠組みを示すに当たり、そうした論争について考慮された形跡は見当たらない。

そのような項目を不用意に研修の中に取り入れることには慎重であるべきであるが、しかしそうした項目は、自らどのような行動を取るべきかを定める「指導原理(guiding principles)として働きうるものであり、教育から完全に排除してしまうこともまた望ましいことではない。このような項目も無理なく教育活動の中に取り入れていくための枠組みを提案することもまた極めて重要なことである。

そこで本論文では、上記報告書に示されている「態度」諸項目を、脱文脈化の上カテゴリ化

することにより、(1) 他者との接し方に関わる項目、(2) 学習観・教育観に係わる項目、(3) 教育実践をめぐる省察に関わる項目、(4) 組織・社会の改善に関わる項目、の4つに再構成した。そしてフォーマル学習としての教師研修では主に(3)の一部を扱うものとし、(1)(2)は(3)に含まれる「価値観の問い直し」という下位項目の「内への深化」の結果として、また(4)は(3)の「外への拡張」の結果として間接的に扱っていくというグランドデザインを提案した。さらにこの「内への深化」は、「受講者本人の自主的判断に基づくもの」となるよう、自らの実践に立脚しつつ、そこで生まれる問題に対応する過程において、自発的変容が生じるような促しの方策を考える必要があることを強調した。



3) 「態度変容」を促す実践の報告とその分析 (宇佐美 2022b)

ここまでの研究により、「態度変容」を促す教育活動について、それを支える理念的裏付けはほぼ完成したと言える。そこで次の段階として、実際に「態度変容」を目指した教育活動を実践し、その中で参加者にどのような態度の変容が起こったか、またその変容は理念的裏付けにかなうものであったか、さらにそうした変容を促すために、教育運営者としてはどのような工夫を行うのが効果的かについての考察を行うこととした。

研究代表者は都内某大学における「言語と社会活動」という授業において、参加者に、自らが他者の言語運用をどのように評価しているか、また自分自身の言語運用がどのように評価されているかを振り返る諸活動を実践した。それらの活動の一環として、「家電リサイクル」の手順を説明した文書を、日本語を母語としない人々にもわかりやすいポスターとして書き換える、という作業を行った。小グループに分かれてのポスター作成、プレゼンテーションの後、作業およびその後のプレゼンテーション・質疑応答において気づいたこと、感じたことを書かせるという課題を提示した。ここで得られたコメントを「第1次コメント」とする。さらに次の授業において、参加者から得られた第1次コメントを、授業実施者側がいくつかの観点に分けて整理し、参加者に紹介するとともに、他の参加者が書いたコメント内容も踏まえ、再度コメントを書かせるという作業も行った。ここで得られたコメントを「第2次コメント」とする。

第1次コメントでは、「リサイクルを促すために、ポスターにおいて『家電リサイクル法』という法律に言及すべきか」ということについて、以下3様の方針が示されていた：

- (ア) 処分方法さえ分ければよいので、法律についての言及は不要
- (イ) ルールを守ってもらうためには法律にも言及したほうがよい
- (ウ) そもそもなぜリサイクルが必要なのか、その本質的な理由をわかってもらうべき

ここで授業実施者側としては、どの考え方が特に優れているかといった「評価」は行わず、「リサイクルのルール」に言及した多様なコメントがこの3つの方針に分類できたこと、どの考え方もそれぞれ成立しうるものであることを淡々と紹介するにとどめた。

このように、他の参加者のコメントに接した後で、再度執筆することを求めた「第2次コメント」においては、内容的に格段の深まりを示したコメントを多数見出すことができた。第1コメントでは、「～するのがいい」「～することが重要」というように、自分たちが実際に行った行動や、望ましいと考えられる行動をそのまま記述したコメントが多かったが、第2次コメントにお

いては、以下に示すように、それまで自らが有していた価値観を問い直し、更新するような内容のものが見られた（下線は引用者によるもの）：

- 難しいから内容を省いてしまおうというのは相手が望んでいなくても義務のように家電を捨てる時にお金を払うことを強要することになり、相手を思った対応ではなく自分達のルールに合わせて半強制的に適応させようとする、人を操作することになるのだと気づいた。
- 私は非日本語母語話者にリサイクルの必要性を伝えるための方策にばかり注意が向いていた。（中略）リサイクルは必要なルールとして決まっているため、それを守るように促す、ある意味で上からの押し付けが垣間見える内容であった。

いずれも、「やさしい日本語で伝える」という、一見他者に配慮しているように見える自分の行動の背後に、「自分たちのルールに一方的に従わせる」という強制力が働いていることに気づき、反省するにいたっていることが読み取れる。これはまさに、価値観（何に価値を認めるか）が逆転する経験であったと考えることができる。さらにこうした価値観の逆転は、授業実施者からの直接的な指導によるものではなく、他の参加者が書いたコメント（ただし整理して示されたコメント）に接することにより、自ら自発的に気づいていったものである、ということに着目したい。これは、2)で言及した「受講者自身の自主的判断に基づく『内への深化』」が、教育活動の中で現実に起こった例であったと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宇佐美洋	4. 巻 181
2. 論文標題 育成可能性からみる「態度」概念の再整理 「日本語教育人材に必要な態度」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 96 - 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本郁代	4. 巻 24
2. 論文標題 学習者の相互行為能力 会話分析からのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 146-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 文野峯子	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 「日本語」授業における教師のコミュニケーションの課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 144-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田和代・水上悦雄・森本郁代	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 話し合いの可能性：異質な他者との対話を通じた学習とは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇佐美 洋, 岡本能里子, 文野峯子, 森本郁代, 柳田直美	4. 巻 17
2. 論文標題 「演じること」による教師の変容の可能性 フォーラム・シアターに参加した日本語教育支援者の語りから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 383-403
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宇佐美洋	4. 巻 26
2. 論文標題 日本語教育人材の「資質・能力」育成に関わる諸概念を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語・情報・テキスト	6. 最初と最後の頁 13- 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 足立祐子・松岡洋子	4. 巻
2. 論文標題 日本語教育における教師教育研究の概要と教師教育の枠組み - 日本語教育学会(1992)を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究 第二回日本語・日本文化研究国際討論会論文集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 宇佐美洋・文野峯子
2. 発表標題 「気づき」の質を問うためのケーススタディ 「内への深化」「外への拡張」を目指して
3. 学会等名 言語文化教育研究大会 第9回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 「主体性を支える省察」の意味と意義を考える
3. 学会等名 令和4年度日本語学校教育研究大会（日本語教育振興協会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 実践における「評価」を考える
3. 学会等名 基礎日本語教育実践研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 「評価」の本質を再考する
3. 学会等名 大阪YMCA日本語教育センター 日本語教師のためのじっくり学ぶ講座
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 裁判官と裁判員を「チーム」にする実践 参加者を指し示す表現の選択に焦点を当てて
3. 学会等名 法社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 異なる他者との話し合いに見られる他者の視点や立場への志向
3. 学会等名 地域政策学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡洋子・足立祐子
2. 発表標題 移民背景の学習者に対応する言語教師に求められる異文化能力要素 - ヨーロッパの言語教師養成からの一考察 -
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 言語教育における「態度」概念を構造化する
3. 学会等名 第30回小出記念日本語教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 張承姫・山本真理・森本郁代
2. 発表標題 教師に必要な会話の知識とはなにか 雑談場面「ほめる・愚痴る・経験を語る」の分析から
3. 学会等名 第30回小出記念日本語教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ikuyo Morimoto
2. 発表標題 The multimodal ritual practices used for organizing transitions between activities in a Budo class: an analysis of a Taïdo lesson
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 USAMI, Yo
2. 発表標題 Systemising attitude constructs and examining their trainability in language education (「態度」概念の再構成：言語教育において「態度」は扱えるか?)
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia Conference 2021 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 足立祐子・松岡洋子
2. 発表標題 日本語教師のためのコミュニケーション力養成研修の内容検討
3. 学会等名 異文化間教育学会第41回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 言語教育における「技能」「態度」の意味を再考する
3. 学会等名 一橋日本語教育研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 足立祐子・松岡洋子
2. 発表標題 教師に求められる資質・能力の再考 - 日本語教育における教師研修を中心に -
3. 学会等名 日本教師学会第30回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 足立祐子・松岡洋子・林さと子・富谷玲子・宇佐美洋・安場淳・今村和宏
2. 発表標題 日本語教師の「熟達過程」について考える 教室活動における「問題解決能力」という視点から
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森本郁代
2. 発表標題 学習者の相互行為能力－会話分析からのアプローチ
3. 学会等名 第二言語習得研究会第31回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇佐美洋
2. 発表標題 「日本語教育人材に必要な資質・能力」の内容は示されたか？：全体像をとらえるための別解
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第7回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 足立祐子, 松岡洋子
2. 発表標題 移民的背景を持つ学習者に対応できる日本語教師の研修
3. 学会等名 日本語教育学会 2019年度春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡洋子, 足立祐子
2. 発表標題 多様な背景の学習者とコミュニケーションが取れる教師力養成
3. 学会等名 CAJLEカナダ日本語教育振興会2019年次大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金田智子
2. 発表標題 日本語教師の資質・能力 - PAC分析による探求 -
3. 学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(於セルビア・ベオグラード)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 足立祐子, 松岡洋子, 林さと子, 宇佐美洋, 安場淳, 富谷玲子, 今村和宏
2. 発表標題 これからの地域日本語教育人材を問う 「日本語学習支援者」と「日本語教師」は別物なのか?
3. 学会等名 日本語教育学会 2019年度秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金田智子
2. 発表標題 教師の養成・研修に関する社会的動向と今後の可能性 - 日本語教師養成に関して -
3. 学会等名 公益社団法人日本語教育学会文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」シンポジウム 2019
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 庵功雄・編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 260
3. 書名 「日本人の日本語」を考える：プレイン・ランゲージをめぐって（宇佐美洋担当：第13章「やさしい日本語」を支える「マインド」とその育成」pp.182-195）	

1. 著者名 村田和代・編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育（岡本能里子担当「ウェルビーイングを目指したことばの教育 多様性に拓かれたことばの教育の学習環境デザイン」pp.165-184）	

1. 著者名 稲垣みどり、細川英雄、金泰明、杉本篤史・編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 368
3. 書名 共生社会のためのことばの教育 自由・幸福・対話・市民性（岡本能里子担当「デザイン力育成を目指した留学生と日本人学生の共同学習を通して」 pp.273-306）	

1. 著者名 佐藤徹、田中富雄、岡本能里子、服部圭子、中川雅道、杉岡秀紀、宗田勝也、佐野亘、森本郁代、香取一昭、野村恭彦、中村香苗、村田和代	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 これからの話し合いを考えよう	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	足立 祐子 (Adachi Yuko) (00313552)	新潟大学・教育・学生支援機構・准教授 (13101)	退職により2022年度以降分担者から外れる。
研究分担者	文野 峯子 (Bunno Mineko) (10310608)	人間環境大学・その他部局等・名誉教授 (33936)	
研究分担者	岡本 能里子 (Okamoto Noriko) (20275811)	東京国際大学・国際関係学部・教授 (32402)	
研究分担者	森本 郁代 (Morimoto Ikuyo) (40434881)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	
研究分担者	金田 智子 (Kaneda Tomoko) (50304457)	学習院大学・文学部・教授 (32606)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------